

議事録

会議名	令和 6 年度第 1 回久留米市子ども・子育て会議 青年部会
日時	令和 6 年 7 月 30 日（火）19：00～20：25
場所	久留米市本庁舎 3 階 308 会議室
出席者	内山委員、大西委員、国武委員、幸若委員、早淵委員、山下委員、渡邊委員 7 名
欠席者	なし
傍聴者	なし
次第	1 開会 2 委嘱状交付 3 委員紹介 4 久留米市子ども・子育て会議について 5 会長・副会長の選出 6 議事 （1）久留米市の子ども・子育ての状況と取組について 7 その他 （1）今後のスケジュールについて （2）こども・若者ワークショップについて 8 閉会
	1 開会 久留米市子ども・子育て会議条例第 9 条第 4 項の規定に基づき、会議成立
	2 委嘱状交付
	3 委員紹介
	4 久留米市子ども・子育て会議について <資料 2「久留米市子ども・子育て会議について」事務局説明>
	5 部会長・副部会長の選出 部会長に大西委員、副部会長に山下委員を選出
委員	6 議事 （1）久留米市の子ども・子育ての状況と取組について <資料 3「久留米市の子ども・子育ての状況と取組について」事務局説明> <質疑応答・意見> 出生率の減少の問題は、出生率の低下以前に、結婚しない男女が多いことが問題だと思う。結婚して自分の家庭を持ちたいという意識が低下しているからだと考えている。

委員	資料 62 ページの「結婚や出生数に関する意識」の結果では、出生率低下の原因として「結婚しなくてもいいと考える人が増えた」という項目の割合が高い。この背景には、なぜ結婚しなくてもいいと感じるのか、という点があると思うが、「結婚生活は大変だ」というイメージがあるからかもしれない。そのように思わせないようにすることが大切である。
委員	結婚については、経済的な余裕がないなどのマイナスなイメージがあり、そのため子どもを持つという次のステップに進むことが難しくなっているのではないかと思う。実際には「結婚して子どもを産もう」と考えている人も多いと思うが、現状としてたどり着くにはどうしたらいいか、難しいのだと思う。
委員	SNS の影響が大きいのではないかと考える。SNS では他人の生活を頻繁に見ることができ、理想が高まる一方で、自分の周囲に満足できない若者が増えているのかもしれない。また、昔は「26 歳までに結婚しなければ売れ残る」という危機感があり、結婚の世話をしてくれる人が周りにいた。しかし、今はインターネットの出会い系サイトやマッチングアプリが普及し、理想がさらに高くなっているのではないかと思う。
委員	SNS の影響は特に若者たちにとって大きく、テレビや新聞よりも SNS からの情報が多い中で、理想像が勝手にできているのだと思う。
委員	不登校の増加の原因として、親が子どもに寄り添えていないことが挙げられると思う。両親ともに正規の仕事をしている家庭が増え、学童保育が小学校 3 年生までとなっているため、小学校 4 年生からは子どもが一人で過ごす時間が増えている。私たちの時代には、帰宅すると誰かがいて安心感があったが、今の子どもは帰宅しても誰もいない状況で、いやなことがあったら一人で抱え込んでいる。また、両親は帰宅後は家事に追われ、子どもに寄り添えないことが不登校の主な原因だと思う。学童保育を小学校 6 年生まで延長することで、子どもが一人で過ごす時間を減らし、不安を取り除くことができるのではないかと考えている。 さらに、小中学校の教員は人手不足で疲弊していることも原因の一つだと思う。子どもたちには教育が一番大事だと思う。勉強以外に私生活の面で、昔は先生たちが一人一人に寄り添っていたが、現在はできていないと思う。小中学校の先生に対する支援を行っていく必要があると思う。
委員	「先生たちが疲弊している」という意見には私も同感である。不登校については「個人の課題」だけでなく、「環境的なもの」であると考えている。両親が共働きの家庭が増えたことで、子どもとの関わりが減っているため、不登校の背景となっていると思う。また、小中学校や高校においても、教員の人手不足や負担増

	加が、子どもと関わる時間を削減している。
委員	核家族化の進行も原因の一つだと感じる。以前は祖父母が家庭にいて支えてくれたが、今はそうした環境が少なくなっている。
委員	結婚については、「自分で全てやらなければいけない」「人に迷惑をかけてはいけない」という意識から、全部自分で子育てしなければならないというイメージが強いと思う。また、近所付き合いがない核家族のシングルマザーは、自分のことで精一杯で、昔のように近所のおばあちゃんが気にかけてくれることが少なくなっている。このため、子どもを支える大人同士のつながりが必要だと思う。あまり遠慮せずに声をかけ合うことが大切である。
委員	保護司をしていて、対象となる未成年者の家庭を見ていると、ひとり親家庭が多いと感じる。非行少年は相談できる相手がいなかったり、近所の人に関わる機会が少ない場合が多い。したがって、非行少年が育ったのはその環境の影響だと思う。昔は近所のおばさんが、悪いことをしている子どもに注意してくれていた。そのような環境を再び作る必要があると考える。
委員	行政は、クレーム処理に追われ、萎縮していると感じる。それでは負の連鎖が続く一方で、大切なものは大事にして、市民と共に取り組んでいけば、クレームに振り回されることも減ると思う。
委員	学童保育以外でも、市に協力して、子どもたちが学校から帰って近所のおじいちゃん、おばあちゃんの家で過ごす取り組みなども良いと思う。
委員	問題が起こることを恐れ、安全策を重視するあまり、ひずみが大きくなっているように感じる。問題が生じた際には、どのように対応するかを皆で考えていくことが重要だと思う。
委員	子ども向けの土曜塾で、刃物を使って竹を削り菜箸を作る工作を試みた際、保護者から「ケガをしたらどうするか」との意見があったが、ケガを通じて刃物の使い方を学ぶ面もある。過度に安全を求めるのではなく、「少しケガをしても治る」という社会が必要だと思う。
委員	安全だけを求めて育ってきた子どもたちは、デメリットのある結婚は「いやだ」とか「しなくても良い」と思うかもしれない。ケガは学びにもなる。ケガを推奨するわけではないが、ケガを経験しないと人の痛みがわからないこともあると思う。

	問題を抱えた子どもを持つ親は、子どもたちが小さいため「自分で何とかしよう」と考えがちだが、子どもが成長した場合、近所の人は何も知らないことになる。たとえば、大声を出して歩いている子どもが、実は大声を出せば落ち着く子で優しい性格の子どもであることを理解されず、周囲から「危ない」と通報されてしまうこともある。その子を知ることによって「あの子はそういう子だから大丈夫」となる。皆の意識を変えていくことが大切だと思う。 子どもの教育にはいろいろな教育機関があるが、年配者への教育機会も必要。子育て世代が年配者に押しつぶされると感じる時がある。次世代をしっかりと教育するための循環ができればと願っている。
委員	個人のプライバシーが保護される一方で、逆にそれがバラバラになっていると感じる。それを希薄化と呼ぶのかもしれないが、だからこそ「お互いに繋がり合う」機会や場がこの社会の中に必要だと思う。 本を読みながら、「個人主義が進むとバラバラになる」という内容が面白いと感じた。日本は人口減少や多くの課題を抱える中で、人と人との繋がりが重要であり、バラバラになっているものを繋げるために必要なものは「配慮」であり、「思いやり」とも言えるだろう。その中で紹介されていたのが、家族旅行の話である。お父さんは『温泉に行きたい』、お母さんは『ショッピングに行きたい』、お姉ちゃんは『ディズニーランドに行きたい』、僕は『何もしたくないから家に居たい』と言った場合、各自の意見を尊重すれば、結局バラバラになってしまう。バラバラであれば、家族としての連携は取れない。そこで重要なのはお互いの「配慮」。家庭内での配慮があれば、お母さんが「おばあちゃんの誕生日のために贈り物を買に行きたい」と考えていることを知り、子どもたちも理解する。そして、お母さんに協力することで家族の結束が生まれる。そのようなことを、「配慮」、英語では「インクルージョン」と書いてあった。お互いを知ることがこの社会では非常に重要だと思う。 オリンピックでは、勝ち負けだけでなく選手のサクセスストーリーを知ることによって、更に応援したくなることがある。人に寄り添うことで様々な問題が解決しやすくなると思う。こうしたつながりはコミュニケーションから生まれるため、人と人とが話す又は交流できる場所は非常に重要だと考える。
委員	非行少年や不登校の子どもに対しては、「知る」ということが重要だと思う。不登校の子どもは何かきっかけがあるので、それを知ることによって理解できる。目の前の現象だけを見るのではなく、その理由を知ることによって、役割分担や助け合いの環境を構築できればと思う。 久留米で「知る」場を作ることが、子ども・子育て計画の柱となれば良いと思う。また、子どもを支える大人を支える計画や支援も必要だと思う。

委員	現在、高校で働いているが、最近ひとり親の家庭が増えている印象を受けている。両親は一生懸命に子育てをしているが、忙しさから子どもに寄り添う時間がないことが多い。親の帰宅が遅く、子どもが起きた時には親が仕事に出ていることが多いため、寄り添いたくても寄り添えない状況がある。しかし、子どもたちは卒業式などの際に保護者に感謝の言葉を述べることが多く、子どもたちは本心で親に感謝していると思う。ただ、日常生活ではそれが見えづらく、親は「自分が頑張っているのに子どもに理解されない」と感じ、イライラしてしまうこともある。 自分の親の職業を知らない子どもも多い。遅く帰る親を見て、作業着を着たまま帰ってくる姿を見て「関係のある仕事なのだろう」と考えるだけで、どんな仕事をしているのかを知る機会が少ない。そうした会話や配慮が欠けている現在の状況は非常に難しいと感じる。 また、「学校の先生の疲弊」という話があったが、「令和の日本型教育」において最初の課題に挙げられたのは「地域や家庭でやっていたことを学校が見るようになり、教師の業務が拡大し負担感が増している」ということだった。学校側の責任の重さを感じている。教師が相談を受けて解決できなかつたり、抱え込んでしまったりするため、南筑高等学校では担任を二人制にした。二人で寄り添うことで、余裕が出てきた。一人で対応せずに、二人またはチームで対応している。 市から、生徒に「SOS の出し方」の講義を行ってもらった。また、高校の授業料無償化については、実際には校納金や PTA 会費がかかるため、経済的に困窮している家庭が多いことから、滞納問題も生じる。分割払いや支援方法を考えている教師もいるが、市からの意見には「支援できる方法があるかもしれない」という助言があり、このように行政職員の知識を活かすことで、解決に繋がると実感している。 南筑高等学校では「地域ボランティア科」があり、地域に関心を持ち課題を見つけて考えることが目的だが、子どもたちの発想には素晴らしいものがある。古賀市では、高校生政策提言グループがあり、高校生が市長へ政策を提言する取組を行っている。ある学校では、企業がクライアントになり、企業の課題に対して、高校生が 1 年間考えアイデアを企業に提案する取組が行われている。
委員	昔の中学生は「むすっとしているのがカッコいい」という印象がありましたが、現代の中高生は明るくなったと感じている。
委員	思春期なのに反抗期が少なくなっていると感じている。
委員	高校でも不登校であった生徒が、高校に入ってから変わることもある。変化のきっかけは環境や本人の思いかと思う。高校入試が変わってきており、内申書が必要だったため不登校の生徒には不利だったが、不登校でもチャレンジ変われる

	ということで、どの学校も不登校の生徒でも受け入れるという風な制度に変わりつつある。不登校で悩まれているところもあるかと思うが、高校で新たなチャンスを見出す機会が広がっていると感じている。
委員	久留米市は子育てにおいて非常に充実していると感じている。専門機関やこのような会議があることはありがたい。
委員	先生方の業務改善などについても、この場で議論できると良いと思う。
委員	昔の先生は自己犠牲で成り立っていましたが、今の先生にその期待はすべきではないと思う。彼らにも家庭ややりたいことがあるので、周囲や PTA がいかにサポートできるかが重要。子どもたちが幸せになるには、先生たちが幸せでないと実現しないと思う。
委員	学校では、これまでの教員が管理する教育だったが、生徒指導も新しくなり、指導から支援に変わった。以前は大人が決めたことをまずやらせるというところからスタートしていたが、今は子どもたちのやりたいことや持っているものをどう伸ばしていくか、そのための支援となった。子どもたちの意見を積極的に取り入れ、校則にも反映させるという風になんて変わった。子どもには理由があり行動するもの。それをどう大人の目線で将来に向けて引っ張っていくかが大切であると思う。
委員	昔は保護者が先生を敬っていたため、子どもも当たり前で尊敬していたが、今は逆に保護者が先生を下に見る傾向がある。PTA にもモンスターペアレント的な面が見られる。先生方が楽しく健やかであれば、子どもたちにも良い影響を与える。そのようなサポートができればと思う。批判ばかりされていると、学校の先生もやりがい失ってしまう。
委員	子どもが不登校になると、親は子どもを育てるという気持ちから、子どもを見守るように変わる時期がくる。子どもが自己決定する過程で成長する。不登校から歩んでいくのが一番大事なところだと思う。今まで大人がしてあげていたことから少し手を引くことで、いろいろな部分が楽になっていくということもあると思う。親も辛い状況に置かれるが、その時こそつながりやすくなる。
	7 その他（１）今後のスケジュールについて ＜資料４「今後のスケジュール（予定）」について事務局説明＞ 意見なし

	(2) こども・若者ワークショップについて <資料5「こども・若者ワークショップ」について事務局説明> 意見なし
	8 閉会